

瀬戸内の芸術祭 島の個性と響きあう展開に

石井 亨 農事組合法人理事・香川大非常勤講師



今夏、現代美術の有名作家を国内外から集め、七つの島と一つの街を舞台に、瀬戸内国際芸術祭が開かれる。105日の期間中の集客は、30万人とも50万人ともいわれる。私の住む豊島でも美術館を建設中だ。

先行した新瀧の越後妻有アートトリエンナーレ「大地の芸術祭」の成功は、確かに財政難に苦しむ地方の官財界を刺激しているだろう。また、瀬戸内においては、直島が「アートの島」として、海外からも少なからぬ来訪者を集めている。

だが私は、この先例ゆえに、この一大イベントに違和感を覚える。「大地の芸術祭」は、私も2度訪問した。地域の生活と結びついた芸術祭として評価すべき点が多い。ただ、新潟県の山間部である越後妻有と、島では条件が違いすぎる。

仮に、観客の10人に1人が豊島を訪れるとして、3ないし5万人。平均して来てもらえればいいが、間違いなく週末と夏休みに集中する。人口千人足らずの島に、1日千人の来訪者となると、船の増便があっても島民生活に支障をきたすのは必至だ。病人が出た場合の心配も募る。

島内バスを、期間中に限り実行委員会が運行するというが、視野に入れている補助金は本来生活者のためのものである。本末転倒ではあるまいか。来訪者も大変だ。混雑して美術館や作品の入場制限、乗船待ちが起き

ても「じゃあ先に別の展示に回ろう」という選択肢は島にはない。豊島に来てもらった方がいいが、双方に不満が溜まるだけ、という状況になりかねないのだ。

もう一つ、より根本的な懸念がある。巨額の資本が投じられた美術館や現代アートが、はたして豊島になじむのだろうか。

島は、一つの人格のような世界だ。島ごとに個性も来歴も異なる。直島が、現代アートの島としての情報発信力を持ち得たのは、一私企業の20年近い投資が続けられた結果であり、越後では、最初は懐疑的だった住民が、進まぬアート制作を見かねてボランティアと共働して、誇りを取り戻していった過程に今日の礎がある。それも1年の試行錯誤を経てのことだ。

先例があったせいで、行政や財界で構成される瀬戸内国際芸術祭実行委員会では、無批判に合意形成され、依存と要求だけが先行したように見える。まず予算ありき。金の配分を通して共働するのでは、人間不在のハコモノ行政と変わらぬ。

豊島は自然豊かな福祉の島であり、産業廃棄物不法投棄事件では見返りを求めないことで県との調停を成立させた自治と自律の島である。アートが島々の個性や人々を輝かせる可能性には期待したいが、大がかりすぎる仕掛けは、島ならではの個性を埋没させかねない。

アートと島のコラボレーションを継続可能なものにするためにも、それぞれの島の個性や生活と響きあうような形へのもっと地道で、より丁寧なアプローチへと早急にカジが切られるべきだと考える。